

むかし、あるところに、なかのいいおじいさんとおばあさんがいました。

おばあさんは、いつも、

「じいさま。わしが死んでも、お墓にうめずに、神だなのそばに置いてくださいな」といっていました。おじいさんも、

「ばあさま。わしが死んでも、お墓にうめずに、神だなのそばに置いておくれ。どっちが先に死んでも、埋めずに置いておこうな」といっていました。

やがて、おばあさんが先に死んでしまいました。おじいさんは、

「約束だから、神だなのそばに置いておこう」といって、おばあさんを入れた棺おけを、お墓にうめずに神だなのそばに置きました。

その晩、夜がふけると、棺おけの中から、おばあさんが、

「じいさまあ、じいさまあ」とよびました。おじいさんは、

「おうおう、じいはここにおるからな」と答えました。すると、おばあさんはだまりました。けれどもしばらくすると、また、

「じいさまあ、じいさまあ」とよびます。

「おうおう、じいはここにおるからな」というと、だまります。それがひと晩じゅう続きました。つぎの日もつぎの日も、毎晩、夜がふけると、

「じいさまあ、じいさまあ」

「おうおう、じいはここにおるからな」

ある日の夕方、ひとりのお侍が、

「おたのみ申す、おたのみ申す」といって、おじいさんのうちにやって来ました。

「旅のとちゅう日が暮れてしまったんだが、宿もないし、ここで泊めてもらえんだろうか」

おじいさんは、

「うちに泊まってもらってもいいけども、夜がふけると、『じいさまあ、じいさまあ』って、夜が明けるまでよぶ声をするぞ。それでもよければ、泊まって行きなさい」といいました。お侍は、

「では、おたのみ申す」といいました。

しばらくすると、おじいさんは、隣の家にお風呂をもらいに行こうとして、お侍にいました。

「おれは、隣へ行ってお風呂に入って来るから、おまえさん、いろりにあたりながら留守番すばんしててください。もし『じいさまあ』って聞こえたら、『おうおう、じいはここに
おるからな』と聞いててくださいや」

おじいさんは、お侍にそうたのむと、隣へ出かけて行きました。

お侍が、いろりの火をたいていると、しばらくして、

「じいさまあ、じいさまあ」と、声がしました。幽霊ゆうれいのような恐ろおそしい声でした。お侍は、ああ出て来たわいと思って、

「ここにおり申す」といいました。「おうおう、ここにおるからな」といえばいいものを、お侍のことだから、お侍の言いかたで返事へんじをしました。すると、また、

「じいさまあ、じいさまあ」と聞こえます。お侍は、また、

「ここにおり申す」と返事しました。すると、神だなのそばでガターンと音がして、棺おけがひっくり返って、ふたが開きました。そして、白い着物きものを着たおばあさんが、ずるんずるとはい出てきて、

「じいさまの声とちがうー」といいました。

お侍は、刀かたなをつかんで、飛ぶように逃げて行ってしまいましたとき。

昔こつぽり

村上郁再話

資料『大山北麓の昔話』稲田浩二・福田晃／三弥井書店